

たゆまぬチャレンジの根底にある まちづくりの精神

2

有馬温泉旅館協同組合 専務理事
一般社団法人有馬温泉観光協会 副会長
株式会社御所坊 代表取締役社長

金井 啓修

絵に描いたような青い海と白い雲。子供たちが波打ち際ではしゃぐ光景を見ながら、自分の運の無さと今後のことを案じていた。

観光客のいない観光地は寂しい。宿泊客は我々家族だけではないのかと思うほど閑散としていた。子供たちも飽きてきて「どこかへ行こう」と言い出した。

あれは阪神・淡路大震災発生直後から親元に子供たちを預けて約ひと月という頃。さすがに寂しくなったのか有馬に帰りたいと言ってきた。我々夫婦も震災発生後から忙しく走り回っていたので二月の連休の休みを利用して、神戸を離れて沖繩ま

で気分転換にやってきた。

琉球ガラスを見学に行った。そこで赤色の一輪挿しを見つけた。価格を見ると旅館で使用するには少し高い。スタッフもすぐに割ってしまうのではないだろうか？ひよつとしてお客様が持つて帰らない？などと心配してしまふ。

「そっか！ギャラリーを創ろう！」
なぜか、考え方はいつも飛んでしまふ。起承転結でなく、起結転承。思い起こせば小学生の算数の応用問題でもそっかだった。答えを見つけ、後から式を作成する。
今回は、僕がまちづくりを実践する上で感じているいくつかの必要な

要素、人とのつながりやものの考え方、発想などを、阪神・淡路大震災（一九九五年二月十七日、以下、震災）での取り組みやエピソードを例に挙げてみたい。

1 ギャラリーを創ろう！

朝食で旅館のレベルが分かるように、ギャラリーがあるかどうかで温泉地の文化度が分かる

ギャラリーを創ると少々高い器や備品も卸価格で手に入る。それを販売する。売れば、旅館の備品、商

品見本と考えたらよい。それに、作

家が集まれば旅館や地域の質が向上する。なぜなら作家はモノづくりのできる人たちが創造力やネットワークを持っている。ネットワークが広がるといういろいろなモノ、モノ、モノが集まる。すなわち温泉地の文化度が向上する。

震災で崩れた蔵の漆喰壁を補修した。クラフトや人の手によるモノを活かすために民芸調にならないように気をつけて改装を行った。吹き抜けの二階は展示会を開くスペースとした（ギャラリー・レティール・ドゥロ）。この場所からいろいろな



写真1
震災後、人モノ、コトのつながりを生み出した「ギャラリーレティールドゥロ」(写真提供：筆者)

人とのつながりができ、多くの作家や文化人とのつながりが構築できた。

2 芸者さんの ピアガーデンを やろう！

ピンチをチャンスに、災いを福に転じさせる発想と行動力、温泉地の団結力と本気度が試される！

僕が子供の頃、御所泉源のそばに「竹の家」といううどん屋があった。学校は試験期間中、午前中で終わるので、昼食はいつも竹の家だった。店の中央に大きなテーブルがあり、茹で玉子が籠に盛られて置いてある。

竹の家の並びに検番（練習場）があり、芸者さんたちが三味線や踊りの練習をしている。時々温泉上がりの浴衣掛けの芸者さんたちと一緒に。かつおの利いた出汁の香りを打ち消すように、甘い白粉の匂いが鼻をかすめる。

正月の伝統行事「入初式」にかりだされ、直会で芸者さんに酒を勧

められる。盆踊りという芸者さんが総出で踊る。何かよく分からないが温泉街に暮らす独特の習慣と芸者さんは、幼い頃から体に刻み込まれていた。

「窮鼠猫を囓む」「火事場の馬鹿力」という言葉があるが、災いを転じさせる発想は日ごろの遊び心から生まれるモノだと思っている。オーバーヘッド・キックやカウンターパンチのように、発想も練習していないければ生まれない。

震災の年の六月だったと思う。「一週間でイベントを二つ考えろ」と観光協会から言われた。瞬間に生まれたのが、温泉入浴と昼食をセットにした日帰りプラン（ランチスリッカーポン）。これは有馬の温泉街の活性化につながった。もう一つが「芸者さんのピアガーデン」。

当時、有馬川の河底を親水公園に改修中だった。震災がなくても夏休み期間中は家族連れが多く、芸者さんの需要は少ない。まして震災直後、観光客は皆無で宿泊しているのは工事関係者だけだった。

県の上層部に掛け合う者、周辺

商店主を納得させる者、実際の運営に携わる者、皆が一丸となって「有馬涼風川座敷」の開催にこぎつけた。これは、芸者さんを支えるイベントと言つてよい。震災復興というリアドレナリングが我々を突き動かした。二十回目の今年のオープニングで知事が挨拶に立った。「今では到底できないことだったが、震災復興という事で全面的に支援した……」。時々、来られる方が「どうやってたかのようなことができるの？」と驚くが、平常時だったらとてもできなかっただろうし、最初の立ち上げの



写真2 有馬温泉の底力を象徴する「有馬涼風川座敷」 (写真提供: 筆者)

エネルギーは出なかったと思う。

大雨で設備が流されたこともある。しかし我々はすぐさま復旧を行った。今年も記録的な大型台風で根こそぎ設備を流されたが、有馬の青年部は翌日から再開に向けて土砂を撤去し、新たに栈敷を作り直した。有馬は長い歴史の中で三度震災に遭っているが、その都度蘇生してきた。そのDNAは確実に受け継がれている。新型インフルエンザの風評被害（二〇〇九年）のときも同様だった。たちまちキャンセルで観光客が有馬から消えてしまった。誰もが見えない菌におびえてしまった。

「皆で掃除をして街をきれいにしよう！」各事業所に声を掛ける者、掃除道具を手配する者、予想を超える人々が集まった。そして橋の欄干やあちこちの清掃を行った。観光客は皆無だったが驚くほど多くのマスメディアが殺到した。口の悪い同業者からは「有馬は逆手にとって宣伝し、元を取った」と言われたが、それは褒め言葉と受け止めた。

その後、「かえるキャンペーン」と称してリピート券を配布。お客様

れるようになったのだが、その当時の小学生たちにも大きな衝撃を与えたようだ。今でも彼らは酒を飲むとそのときのことをよく話題に出す。その彼らが中心となって、有馬のまちづくり計画の草案を作成した。僕は「混浴を楽しもう！」と先進地視察にバーデンバーデンを選び誘った。そしてシュトゥットガルトで本場のビール祭りを体験してもらった。参加者は総勢二十五名を超えた。皆で共通の本物体験をするということは重要だ。これは震災後、仲間と合資会社を設立し、「有馬サイダー」を復活させたプロセスと共通するところが多い。

5 多数決で決めてはならない！

有馬の水のラベル選定で、某デザイナーが若手に言ったこと。「好きなのに決める、ただし、多数決では絶対に決めるな！」

若手が作成した草案を基に、『有馬温泉まちづくり基本計画』が議論

された。その中で、有馬温泉の緊急重要な課題は何かというアンケートを取ると、「公衆トイレ建設」というのが大多数の意見だった。僕はおかしいと思った。公衆トイレを作るだけで観光客がどんどん来て、素晴らしい街になるのか？なるわけがない。

それにしてもなぜトイレなのか？トイレ建設は総論賛成でも実際に作るとなると、反対意見や問題が起こると行政関係者は言う。「そりゃそうだろう、誰がきれいに維持管理するのだろうか？」そこで最近多用しているあるアンケートを行ってみると、いろいろ興味深いデータが集まった。

データを基に人々を説得し、納得させて**4**「助平心こそ、重要だ！」で述べたように、トイレだけに少し艶っぽく、**3**「湧くはずのない所に湧くはずのない湯が湧く」のように訪れる人々の知的好奇心を満足させて、**2**「芸者さんのピアガーデンをやるう！」のように、逆手の発想で、汚いイメージの付きまとうトイレを、有馬を代表する名所にしたい。

そのためには、**1**「ギャラリーを創ろう！」のいろいろなネットワークやつながりを駆使し、創造性豊かなトイレにしたいとワクワクしている。

6 有馬に受け継がれているDNAとは？

入初式で飲んでみると、年配の芸者さんは僕の孫を抱きながら、親父ではなくお祖父ちゃん頃の正月風景、芸者さんとお祖父ちゃんたちの様子を話してくれる。この芸者さんは僕たち親子のことを五代にわたって知っているということだ。

芸者さんという「語り部」のいる温泉地に育ち、その歴史的風土、文化的環境の影響を受けて、僕が始めた数々の試み、特に手作りゲームは青年部や息子たちにも衝撃を与えた。彼らはいち早くテキヤを排除して自分たちで祭りをやり始めた。自分たちでやってきたからこそ、雨で流されても何度でも「有馬涼風川座敷」を再開できる力強さを持っている。

有馬は過去幾度となく災害に遭い、そのたびに復興してきた。その経験や何と立ち直ろうという大事な意識が世代を超えて継承されているからこそできる、それがこの町に流れているDNAなのかもしれない。

最近是有馬にも外資が流入し、今まで付き合ったことのない人とも付き合い合わなければならないが、イベントや旅行という本物の共通体験を通じた従来通りのやり方で説得し、納得してもらい、有馬のDNAをつないでいくしかないだろう。

今は、子孫からの預かりもの。長い歴史の中で、我々が温泉地の今を守っていくことは、何代も先の子孫へつないでいく大切な一過程なのだ。

(かない ひろのぶ)

金井啓修(かない ひろのぶ)

有馬温泉生まれ。株式会社御所坊代表取締役社長。二一九一年開業の有馬温泉老舗旅館「御所坊」十五代目。調理師専門学校卒業後、北海道・定山溪温泉の旅館に入社。七七年有馬に戻り、観光協会青年部を結成し活性化に取り組み。八一年に二十六歳で現職に就任。個人客向けの個性的な宿づくりに成功。競売下の旅館を改装した「有馬玩具博物館」をオープン。商店街の空き店舗利用の飲食店経営など、まちづくりの牽引役。有馬温泉旅館協同組合専務理事、一般社団法人有馬温泉観光協会副会長も務める。